

氏 名 渡部 鮎美

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大 1268 号

学位授与の日付 平成 21 年 9 月 30 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻  
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 現代日本における農業と関わる人々の労働観に  
関する民俗学的研究

論文審査委員 主 査 准教授 小池 淳一  
准教授 高橋 一樹  
教授 安室 知(神奈川大学)  
教授 鳥越 皓之(早稲田大学)  
チーム長 山下 裕作  
(農業・食品産業技術総合研究機構)  
准教授 山田 慎也

## 論文内容の要旨

本論文は現代日本の労働観に関する民俗学的研究である。本論文でいう労働観とは、人々が理想とする働き方を示す労働倫理にときに反しながらも地域社会で容認されている人々の働き方を支える観念をいう。ここでは、人々が働くということをどのように考えてきたのかを言説化された労働倫理だけではなく、実際の行動からも考えていくことを目的とする。分析の対象としては、農業という産業と関わりながら現在まで暮らしてきた農家やパートタイムの農業労働者（以下、農業パート）を選択した。

本論文は全5章からなる。序章では研究史を概観し、研究の目的と方法、意義を明らかにしている。1章から3章までは事例研究である。終章では1章から3章までの議論を技術、雇用関係、働き方という指標でまとめ、本論文で示した労働観が研究史においてどのような意義をもつのかを明らかにした。

序章では現代日本における農業と関わる働き方が先行研究において政治・経済論、社会構造論、生業論という方法で論じられてきたことを示した。先行研究では農業と関わる人々の農業技術や雇用関係、働き方について個別に論じてきたが、それらを総合化する視点は微弱であった。また、先行研究の多くは農業と関わる人々の過去の働き方に関心をおいていたために、資料的制約などの問題もあった。こうした先行研究における問題を解決するために、本論文の方法として参与観察や聞き取り調査などのフィールドワークを通して、現代の農業と関わる人々の働き方を個別具体的に明らかにする民俗学的手法を用いることを示した。分析にあたっては個人、家、地域という分析単位を設けた上で、技術、雇用関係、働き方を指標として集めた定量的・定性的なデータを用いることとした。

第1章では個人を分析単位とし、技術と働き方という指標で、農業と関わる人々の労働観を論じた。秋田県大潟村の専業農家と山梨県富士河口湖町河口の兼業農家がともに用いてきた空中田植えという稲作技術に着目して彼らの働き方を比較し、技術をめぐる彼らの労働観を明らかにした。彼らの労働観は経済的な合理性やリスク管理とは相反するものであったが、人々の技術の運用に大きく関わってきた。さらに他産業や他業種と関わりの中で変わってきた彼らの技術や働き方を論じ、生業活動を他産業や他業種との関わりの中で論じる労働論という方法の必要性を示した。

2章以降では兼業農家と農業パートを事例とし、2章では地域、3章では家を分析単位として農業と関わる人々の労働観を論じた。2章で対象とした地域は大潟村の農業パートの供給地となってきた八郎潟周辺地域である。2章ではまず、1章で取り上げた大潟村の農家で働く八郎潟周辺地域の農業パートの技術、雇用関係、働き方を示した。そして2章では農業パートという仕事が生まれたことで八郎潟周辺地域の人々の働き方が大きく変わっていったことを示した。また、農業パートたちが技術を研鑽し、大潟村の農家や農業パートを派遣する企業が新たな雇用関係を模索していったことで現在のよう能力本位の近代的な農業パートの雇用関係が成立していったことを明らかにした。2章では八郎潟周辺地域で農業パートをする農家だけではなく、農業パートをしない農家も分析の対象とした。この地域では多くの農家が、自家の農業よりも出稼ぎや農業パートなどの仕事を中心とした生活をしてきた。ここでは農家の兼業に注目し、彼らが兼業する仕事で用いてきた生業技術やそこでの雇用関係を明らかにした。また、農業とともに数々の兼業をしてきた彼らの一生、一年、一日の働き方を示し、そこから地域の労働観を論じた。それは、現代では望ましくないと考えられる転職や兼業をごく当たり前の働き方として考え、どんな仕事にも自らの力で積極的に楽しみをつくり出す、という労働観であった。

3章では家を分析単位として農業と関わる人々の働き方を論じた。まず、農業を中心とした生活をしてきた千葉県富浦町丹生の農家A家で働く農業パートの技術、雇用関係、働き方を示した。そして前近代的な雇用関係と近代的な雇用関係の両方がみられるA家の農業パートではパート間で農作業の技術差が大きく、働き方や仕事に対する意識が大きく異なっていることがわかった。また、A家の家族についての分析では彼らの兼業労働における技術、雇用関係、働き方を具体的に示し、その労働観を論じた。そして農業と関わる人々の労働観のなかで「働くこと」とは労働や余暇と定義される活動の両方を含むものであったことを示した。

終章では3章までに民俗学的手法で示してきた農業と関わる人々の多様な働き方を技術、雇用関係、働き方の3つの指標で整理し、彼らの労働観を論じた。そして彼らが農家や農業パートといえども農業以外の仕事や活動に多くの時間を費やしてきたことを示した。その上で終章では彼らの労働観が農業という産業や農家という職業に固有のものとして典型的に理解することができないことを示し、人々の生業活動を労働論として論じる本論の方法の有効性を明らかにした。

本論文では人々の生業活動を民俗学的手法によって、人々の生業活動全体を総体的に論じることで、人々がときに経済的合理性や労働倫理に反するような働き方をしてきたことを明らかにした。働くこととは人々を規制する労働倫理を乗り越えていくことでもあったのである。本論文では参与観察を中心とした民俗学的手法によって個別具体的な人々の働き方を示し、既成概念化された労働と余暇といった構図や産業や職業といった枠組みから離れ、人々の生業活動そのものを論じた。現代社会のなかで主流となっている労働倫理の多くは、一生を通してひとつの仕事に励み、そのなかで達成感を得ることが真の労働である、とする。しかし、産業構造や雇用制度の多様化によって一生を通してひとつの仕事に就くことが難しくなっている現代では、こうした労働倫理と実際の労働の間に大きな齟齬が生じている。そして、労働倫理と実際の労働の姿との落差に悩む人々も現れている。こうした時代のなかで言語化された「労働」ではなく、人々の行動そのものから「働くこと」を考える民俗学的労働論は現代に生きることの意味をより深く考える新たな方法となると考えられる。

## 博士論文の審査結果の要旨

本論文は、現代において農業に従事する人々の労働観をいくつかの労働形態と地域性とをふまえて明らかにし、民俗学的に新しい領域を切り開こうとするものである。

本論文をめぐる評価としては、まず、第1に生業とそれに関連する分野の研究史を整理した上で、労働論との融合を積極的に試みようとしている点をあげたい。民俗学に限らず労働をめぐる経済学や社会学、歴史学の議論に留意し、広い文脈から問題を取り扱おうとする姿勢は好ましい。そしてこれまでの兼業やパートタイムのような農業労働については、民俗学や歴史学だけでなく、社会学、経済学といった社会科学分野の研究においてさえも、農家は「社会経済のおかれた状況の中で、兼業という働き方を余儀なくされてきた」という前提に立つものが多かったことに注目し、問題提起をしている。そうした前提自体から問い直す研究姿勢は現実の人間と対峙するフィールドワーカーの姿勢としては正しいものであり、現代に時間軸を設定して農村における労働観を論じるうえでは大きな意味を持つものといえる。

第2に現代農村における多様なワークスタイル（兼業、出稼ぎ、パートタイム、ボラバイトなど）とそれを支える労働観をとらえるために、350日に及ぶ民俗学的聞き取り調査および参与調査を行い、それによる実証的なデータの上に議論を組立てている点を指摘しておきたい。現実の農家に長期に住み込み、仕事を手伝うという参与調査を敢行している点は、本論文の実証性を高める上で大きな意味があり、国内とはいえ、徹底したフィールドワークを下敷きにした議論は貴重である。

これによって第3に、一日、一年、一生という単位で農家とその構成員の生活を復元し、そこから一人の人間また一軒の家であっても、一年や一生という単位では、「ストイックな労働観」と「実態に即した緩やかな労働観」との間を多様に揺れ動くことを実証的に示していることも重要である。現実問題として、現代を生きる農家は、この2つの労働観の間を揺れ動きながら生活を営んできており、出稼ぎやパートタイム、ボラバイトといった働き方を負の意味をもつ労働形態としてのみ捉えてはいない。このことによって、従来の「兼業」という括り方では片付けることのできない、実態としての「生（生きること）」を描き出すことに成功している。

本論文は全体として、現代日本における労働に対する具体的な参与観察と聞き取りとによって、その背後にある実践的な労働の様相とその原理とを導きだそうとした意欲的なものといえる。各章を構成するにあたって下敷きとなった個別の論文の多くは、学会誌や審査を経て学術雑誌に掲載されたもので、既に生業研究のなかで一定の評価が与えられているにもかかわらず、今回、新たに論文として仕立て直されるにあたっては徹底した再構成が図られ、論旨の一貫性を希求している。その姿勢はいささか冒険的ではあるが、民俗学における生業研究としては水準を超えた力作といえる。

ただし、問題が皆無というわけではない。関連する農業経済学や経営学の観点からすれば、図表の構成に不十分なところがあり、用語の取り扱いに関してもさらに慎重な姿勢が望まれる箇所がある。学際的に新しい提案をしようとする積極的な試みをしたために陥った問題点ともいえる。対象および分析の視角・方法に関しては成功している部分もあるだけに惜しまれる欠陥である。また、いささか文章が晦渋かつ単調で表現を再考すべき部分が少なくないのは残念である。これらの点は今後の研究活動の中で改善していくことが望まれる。

こうした問題点もあるものの、本論文は全体として積極的な研究姿勢に裏打ちされた豊かな内容を持つことが審査を通じて確認された。以上を総合的に鑑み、審査委員は全員一致で本論文を博士論文としての価値が十分にあるものと判定した。